

---

# 追い詰めないのが愛

えんぴつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

追い詰めないのが愛

### 【コード】

N0114C

### 【作者名】

えんぴつ

### 【あらすじ】

ある日、役所務めの父親が、恥かしい事件を起こして逮捕された。混乱する母親、じいちゃん、姉、そしてぼく。普通なら家族崩壊って感じだけど、ぼくの家はかなりヘンで……。

「ホレ、あの、角の田中さんち知つとるじゃろ。息子さんが入院を繰り返してた。嫁さん、とうとう出て行っちゃったらしいぞ。まだ小さい孫2人抱えて、ばあさん、こぼしとったよ。病気の息子さんも哀れだけど、ありゃ、ばあさんが大変だ」

「私の友達のお父さんなんか、ネットで若い女と知り合って、帰って来ないんだってさ。お母さん、シヨックで鬱になっちゃって、もう家の中、メチャクチャだって」

「ぼくのクラスの友達の家も、お父さんの会社が倒産しちゃって、『家のローンどうするのよ！』って、毎日、夫婦ゲンカなんだって。その友達、塾に来なくなつたよ」

「よかつたね〜うちは。お父さんが健康だけが取柄の公務員で。そりゃ、裕福じゃないけど、とりあえずいまの生活は保障されているんだから。あははは」

それは、ぼくと母さんと姉さんとじいちゃんの4人で、夕げの食卓に座り、いつものように父さんの帰りを待っていたときのことだった。

公務員の父さんの帰宅時間は5分と狂わず、いつも決まって6時半には玄関のチャイムが鳴る。

が、この日はチャイムは鳴らずに電話が鳴った。

そしてその電話に出た母さんが「け、警察！」と叫び、「は、は

い。いまずぐに参ります」と言つて電話を切ると、すつ飛んで警察に向かい、2時間後、テレ笑いを浮かべた父さんと一緒に帰つて来た。

一体、なにがあつたんだろ？ 父さん、スリにでもあつたのかな？ それともオヤジ狩り？

ぼくと姉さんとじいちゃんの前で、母さんは怒りで身体を震わせていた。

「……父さん、駅の階段で手鏡使つて女子高生のパンツ見て捕まつたんだつて。市役所もクビだよ。まったく……」

とここまで言つて、これまで警察でガマンしていた怒りが、一気に爆発した。

「くだらねーもん見やがつて。そんなに見たいか。おーし、見るよ、ほら、三面鏡跨いでやつからよー」

「あ、いや、母さんのはどうも……」

「じゃ、彩子、このエロ親父に見せてやりな。女子大生のじゃダメか？ 女子高生じゃなきゃ、どうなんだよー！」

「あ、ちょっと見たい。でも、娘のは父親として、いかななものかと……」

「まったく、もう母さん情けないよお」

そう言つと、母さんは床にうずくまつて泣き伏した。

「パンツ見ると、警察に捕まるのか。わしは腰が曲がってるから、女子高生のパンツなんかイヤでも見えるぞ。イヤじゃないがの」

最近、軽く痴呆が進んでいるじいちゃんが笑った。

「私が風俗で働けばいいんですよ。父さんの給料ぐらい軽い、軽い」  
短気な姉さんが結論を急いだ。

姉さんが言っていること、ぼくはちょっと違うんじゃないかなー  
と思ったけど、父さんはすかさず

「そっか、売ってくれるか。いやー助かるな父さん。彩子がそう言う  
ってくれて。じゃ、父さん、甘えちゃおっかなー」だって。

これには泣き崩れていた母さんも黙っていない。

「あんだ、親として恥ずかしくないの!」

「いや、売れるモノは売れるウチに売つとかんとな。母さんじゃ、  
もう売れんし……」

「世の中知らないねえ、父さんは。だから役所でも出世できないん  
だよ。いま熟女ブームで、私だってまんざらじゃないんだから」

母さん、話の方向性が違うんじゃない……。

「じゃ、まず母さんから売るといふことで。竜太郎だって、新宿2  
丁目で立派に商売になると思うぞ。どーだ、女にばかり世話には

なれんぞ、竜太郎！」

「えー！！ ぼ、ぼくはまだ女も知らないのに、いきなり男相手はやだよお」

と、母さんがガバツと起きて、「じゃ、知つとくか」。

え、え。

さらに姉さんまで、「大体、竜太郎、そういうのは性差別だぞ」と、わけの分からないことを言い出した。

な、なに？ 「冗談でしょ？ なんでこんなときに、冗談が言えるの？」

「もう分かった、分かった。父さんはうれしいよ。みんな家族のために、自分の身体を売る気があるのが分かって。すばらしい絆、すばらしい家族愛だ。でも、みんな大丈夫だぞ。かわいい彩子や竜太郎に大切な身体を売らせたりするもんか。な、母さん。こんなときのために我が家には蓄えがあるもんな。ボーナスの半分、いつも貯めてる例のあれ。500万くらいあるのか？」

母さんの顔が曇った。

「あ、あれね、え〜と、あれは、パチンコでなくなっちゃった。あははは」

「なんだとーてめー。俺が下げたくもない頭をぼんくら市民のために下げ続けて、稼いだ金をパチンコでスツただと〜」

「わ、私だけじゃないよ、じいちゃんだって、彩子だって、もうみんなパチンコがヘタで困っちゃおう〜」

「売れ！ いまこの場でテレクラに電話して、全員売って来い！」

父さん、自分の立場も忘れて烈火のごとく怒り出した。

「わしも売れるかのお」

「じいちゃんが売れるなら、俺が売るわ」

「ぼくは、パチンコしてないし」

「うつせー、竜太郎は連帯責任だ」

なにが連帯責任だ。父さんが女子高生のパンツなんか覗くから、こっとなったんじゃないか。

大体、母さんも姉さんも、なんで身体を売ることばかり考えるんだろ？ それより父さんの不祥事をもう少し責めればいいのに。本人、反省してないみたいだし。

みんな突然の我が家の危機に気が動転してるのかなあ。

「ね、別に身体売らなくても、とりあえずみんなでバイトでもすれば、うちの場合は暮らしていけるんじゃないの。だって、ローンとかなないんだし」

ぼくは、ごく当たり前のことを言ってみた。

「それもそうだな。父さん、ちょっと頭が混乱してた。なんせ初めてのことだから、役所クビになるの。あはは。そうだ、4人でバイトすれば40万くらいになるもんな。おーよかった、よかった。母さんと彩子とじいさんは、2度とパチンコなんかするんじゃないぞ。父さんももう女子高生のパンツは覗かないから」

「頼みますよ、お父さん」

へ？ 母さんニコニコしている。

「雨降って地固まるだね」

姉さんの言葉に、ぼくが固まった。

「よかった、よかった。これで我が家も安泰じゃ」

そう言つと、じいちゃん、姉さんのお尻を撫でた。

「もう、じいちゃんつたら……」

「あははははは」

確かに我が家はなにがあっても崩壊しそうにない。なぜなら、すでに壊れているから。

でも、あつたかいからいいや。

(後書き)

痴漢行為に“甘い”とか、叱られそうですが、単なるドタバタコメディーです。ただ、最近の親子の暗い事件を聞くにつけ、なんかもっとオープンな家族だったらって思います。もちろん、こんな家族は論外ですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0114c/>

---

追い詰めないのが愛

2010年10月11日10時53分発行